

あの夏 戦後75年

4

1945年の8月15日は「抜けるような青空だった」と、後年語られることが多い。戦中はすべてのものが「灰色」に見えたという、14歳だった少女の目には、どのように映ったのだろうか。今回の「あの夏 戦後75年」では、川越市出身の漫画家・花村えい子さんに「戦争」を語ってもらった。

——自身にとって戦争とは。

「戦争は、私の中では灰色の世界。戦渦に直接遭っていない川越市も、店の棚から品物が消え、ネオンがなくなり、暗い街になりました。絵も小説も外国のものも駄目で、持っているだけで警察に引張られた人もいます。あるのはガリ版刷りの軍隊・戦争ものばかり。見る・考える・叫ぶ自由が奪われていました。夢見る女子学生も恋愛の物語を読むのを禁じられ、私の好きな中原淳一先生の美しい絵も姿を消し、怒りを感じました」

——県立川越高等学校では軍服を作り、終戦を迎えましたね。

「体育館が軍服の生産工場になり、もんぺ姿で製造

暗い街 世界は灰色

漫画家

花村 えい子 さん

はなむら・えいこ 川越市生まれ。終戦時は14歳。1959年、貸本漫画の「紫の妖精」でデビュー。66年から漫画雑誌に連載した代表作「霧のなかの少女」は75年、秋吉久美子主演でテレビドラマ化された。



2007年、小学館クリエイティブから復刻・発行された「霧のなかの少女」

戦争の記憶を描いてきた花村えい子さん (写真家・中村香奈子さん撮影)



に追われました。生地がウールからペラペラの化繊に、ボタンは金属からヤシの実製に替わり、『中途半端な服で戦場に送るのか』と思うと涙が出ました。ある日、軍の偉い人から赤、黄、緑のゼリー6、7個が配られ、自宅に持ち帰りました。母が寝たきりの祖母の枕もとに置くと、幼い弟妹がわっと喜びました。祖母から『もうないのか』と聞かれても『それっきり、

もうないの』と言えません。少しして祖母は亡くなりました。まもなく、校庭で校長先生から終戦を知らされた時、14歳の私は『やってきたことは何だったのだろう』と悔しかった。そして『もう少しゼリーを食べさせてあげたかった』と祖母のことばかり考えていました」

本軍が勝っているという大本営発表に、ふと疑問を持ったことがありました。もしかしてウソではないのかしらと。そんなこと口にしたら警察に引張られます。でも、直感に当たっていたように思いました」

——3月の東京大空襲や8月の広島、長崎への原爆投下の記憶は。

「3月、母は弟、私は妹を背負い、リュックに非常食のカツオ節を入れ、市の

かわいい絵 描くのは反動かも

飯能の清流、緑懐かしい

花村さんは1956年、当時通っていた大阪市の貸本屋の経営者に勧められ、3年後に漫画家デビュー。昨年、画業60周年を迎えたが、ますます意欲的だ。

少女漫画がヒットした60～70年代には睡眠時間を削り、月に300枚も描いていた。その後、ミステリーや文芸にもジャンルを広げ、近年は絵本も手がける。2007年にはフランスの国民美術協会のサロン展覧会に招待されて40点を出品、以降毎年のように出品を続けている。昨年12月には「令和のこころ 一万葉の世界と梅花の宴」(ミネルヴァ書房)の絵を担当した。

埼玉県については、川越市以外では「子どもの頃、親戚がいた飯能市の吾野で夏に清流や緑を楽しんだことが懐かしい」という。

外れの入間川近くまで避難してしまいました。東京の空が真っ赤で、後に様子を知り、胸が塞がる思いでした。原爆投下で、地球が終わりかと思えました。こういうものを人間が作って、人間を殺傷するのか? 考えてしまいました」

——戦後は戦時の絵も描いた。どんな思いからか。

「今人舎(東京都国立市)から提案を受け、2015年、『私の八月十五日』と

今、訴えたいことは。「戦争は、人間が人間に仕掛けるもの。絶対にしてはいけない。幸せになる人なんていません。あの暗い時代は二度と繰り返してはならない。私が女の子の絵にかわいい服を描くのも、そのころの反動かもしれない」

(聞き手・佐伯和宏)



「私の八月十五日①」に花村さんが描いた絵「からっぽの空」(今人舎提供)

いう本で自身の体験を描きました。『特攻隊を描いてみませんか』と別の出版社から提案された時も、身近に隊員を志願した人がいて衝撃を受けたこともあり、引き受けました。鹿児島県の知覧への取材中は何度も泣きました。『君死に給うことなかれ』(1988年出版)です。『死ななないで』と声を上げることができない当時、動き出す列車の音に紛らわせて唱え続けるヒロインの叫びを描きたかったのです」